

太宰 治 と 甲 府

白 倉 一 由

太宰治の文学の展開は三期に分けられる。第二期は昭和一三年から二〇年までの七年間で、第二期の傑作の数々は甲府で書かれており、又甲府を舞台にしたものが多くある。従つて第二期は山梨から始まると言つても良いと思う。

太宰治と甲府との関係を作つたのは井伏鱒二であつた。太宰は井伏の招きにより、昭和一三年九月一三日鎌滝方を引き払い『姥捨』の原稿料で質屋に入つて夏服一揃を請出して着かざり、思いを新たにする覚悟で山梨県南都留郡河口湖村の御坂峠の天下茶屋に來た。以後この二階に滞在して『火の鳥』の執筆を行なつていた。

七月上旬頃から甲府市堅町九三番地の斎藤文二郎夫人の紹介で、

井伏鱒二を通して結婚話があり、九月一八日井伏の付添、斎藤夫人の案内で見合のため甲府市水門町二九番地の石原初太郎家を訪問した。相手の石原美知子は四女で明治四五年生れで、東京女子高等師範学校を卒業し、當時山梨県立都留高等女学校に在職していた。話

は順調に進み一〇月二四日井伏鱒二に二度と破婚しないと言う誓約書を送付するなどして、一一月六日石原家において井伏鱒二、斎藤文二郎夫妻の立会いで婚約式（酒入れ）が行なわれた。

一月一六日御坂峠の天下茶屋を出、石原家の北西斎藤家よりの

甲府市堅町八六番地の寿館に下宿する。寿館は渡辺ふじが經營していた素人下宿で、美知子の母が探して交渉してくれたもので二食付二二円で二階の南向き六畳の部屋であった。石原家は一家総がかりで彼のために座布団寝具一式を運び更に丹前や羽織を仕立てたり襟巻を編んだりした。太宰は殆んど毎日寿館から石原家に来て手料理を肴にお鉢子を三本あけ、ごきげんに抱負を語り郷里の人々のこととを話していた。いつも鉢子三本が適量だと言つて引きあげていたが帰りに諸所を飲み歩いたらしい。『火の鳥』は引き続いだ執筆したがはからずやつと百枚を越える程であった。山梨に關しての第一作目の傑作『富嶽百景』がこの時に書かれる。

『富嶽百景』は富士の百景であると共に太宰の心の心象百景であった。主觀と客觀とは融合し一体となっており、富士は対応する者の心によつて姿を変え、対応する者は富士によつて変えられていく。富士は相對的の存在でありながら没我的境地になつていき、心の百景になつていくのである。

太宰が御坂峠の天下茶屋に來たのは井伏鱒二の勧めであったが、彼自身自己の生活の再生を願つてのことであつた。△東京の、アパートの窓から見る富士は、くるしい△のは彼の東京の生活は△じめ

じめ泣いて、あんな思ひは、二度と繰りかへしたくない／生活のためであり、／富士は、やっぱり偉い、と思つた。よくやつてゐる、と思つた。／のは新しい生活を始めようとする太宰と同様であり、富士の偉さは再生の意識に燃える太宰の今迄の／苦惱／に匹敵すると思つるのである。青年達に招かれて行つた吉田の町での／富士が、よかつた。日光を受けて、青く透きとほるやう／の富士の印象は／維新の志士。鞍馬天狗／の心境の自己だった。甲府の石原家に行つた時の／あ／の富士は、ありがたかった。／のは美知子を一目みてこの人と結婚したいと思つたからであつた。

あまり整い過ぎてゐる富士は／風呂屋のベンキ書だ／と思ひ恥ずかしくなるが、茶屋の娘に／お／客さん！起きて見よ！／と言われ雪の降つた富士を見て／御坂の富士も、ばかにできないぞ／と思つたのはこの娘の存在と大きくかゝつてくる。天下茶屋滞在中の家の一五になる娘をかなり意識的に書いてゐるのは太宰の再出発に強く関係している。

私は、ありがたい事だと思つた。大袈裟な言ひかたをすれば、これは人間の生き抜く努力に對しての、純粹な声援である。なんの報酬も考へてゐない。私は、娘さんを、美しいと思つた。

この娘の献身的な奉仕があるから、娘の一声で美しい富士に見えてくる。

ある時天下茶屋に吉田の遊女の一団がやつて来る。この一団の描寫は巧みであり、この遊女を通じてかつての己の生活、初代を想起す。太宰は初代との生活を清算してここに來ているが、この遊女は初代の変身でもあり、彼の離脱したものが下界からやつて來たので彼にとつて／暗く、わびしく、見ちや居られない風景であつた。／

彼にとつて『HUMAN LOST』の素材となつた精神病院の入院と『姥捨』の初代との顛末はみじめなものであつた。それからの離脱、再生であつたので／苦しむものは苦しめ。落ちるものは落ちよ。私に關係したことではない。／と強く拒否する。しかしそのようないきの姿勢を堅持することはかなり苦しい心境であつた。

富士にたのもう。

この言葉に当時の太宰の心情が良く表現されている。過去の経験と彼の純粹・素直な性格が社会の下層に生きる人々への共感を呼ぶが、現在の太宰にはこのようにしか考えられなく富士を信頼しそれにすがろうとする。自己の苦惱を救う絶対者の存在に富士が見えてくるのである。／富士はまるで、どてら姿に、ふところ手して傲然とかまへてゐる大親分のやうにさえ見え／てくる。雄大なたじろがない富士はたのもしく思えたのもうとするが、しだいに自己を変えていく。強い自己に成長させていくが、この相手への信頼感は神に近い存在にまでなつていつたものと思つ。太宰が傍を通つても振り向きもせず草花を摘んでいる遊女について／この女のひとのことも、ついでに頼みます／と言うのは切実な太宰の実感で今までの理想主義を捨て現実的に生きなければならないことを強く思つてゐる。／おれの知つたことぢやない、とわざと大股に歩いてみた。／のは新しく強く生きようとする信念の表現である。遊女への感懷は美知子との結婚話と同時的に書いており、太宰の過去と未来であつて人生の峠を越えようとする太宰の現在の心境であつた。

新しい自己の生活のために富士に祈るが、日増しに新しい自己は確立されていく。御坂峠の天下茶屋での生活は彼の人生觀を一変していき、弱い自己から強い現実主義的な人間になつていく。絶対的

の存在の富士に相対することができない自己にまでなっていくのである。

三七七八米の富士の山と、立派に相対峙し、みぢんもゆるがず、なんと言ふのか、金剛力草とでも言ひたいくらゐ、けなげにすつと立つてゐたあの月見草は、よかつた。富士には月見草がよく似合ふ。

富士によく似合う月見草の確認は自己のはつきりした場、生き方が確立した人間の心の中からの喜びの表現ではないかと思う。苦悩と孤独な生活は堅実で聰明な美知子の出現によつて終りをつげ新しい生活が始まる。

『富嶽百景』の中程の△ことさらに、月見草を選んだわけは△以後の文草は甲府の御崎町の家で書いている。御坂峠において新しい人生の出发をしたいと考へていた太宰が、美知子との生活によつて実現できた。従つてこの作品の後半は富士に対する月見草の存在が特に強調されている。新しい生活に喜び浸つてゐる太宰の自覚のおのづからなる表出と考へて良い。△富士山、さようなら、お世話になりました。△と言うのは新しい人生の夜明けを得た太宰の心の明るさと人生に対する希望がでてきたのである。△甲府の富士は、山々のうしろから、三分の一ほど顔を出してゐる。酸漿に似てゐた。△喜びのある隠やかな甲府での新婚生活が始まつてゐる。に富士が見えるのは快適な太宰の人生を最も良く言い表わしている表現である。

甲府市御崎町五六番地の借家に移動したのは昭和一四年一月六日であった。この家は秋山浅次郎の借家で美知子の母がみつけてくれた八畳と三畳の二室の家で家賃は六円五〇銭であった。一月七日東

京都杉並区清水町二四番地の井伏鱒二夫妻が媒酌し、山田貞一夫妻（美知子の姉夫婦）斎藤文二郎夫人、中畠慶吉（津島家名代）北芳四郎等が同席して石原美知子との結婚式を挙行した。同夜おそらく美知子を連れて新宿発の列車で甲府に帰り御崎町の家に落ち着いた。太宰の第二期の甲府時代の作品はこの家において書かれる。

この家の最初の作品は『黄金風景』であり、太宰は待ちかまえていたように美知子に口述筆記させた。似後前記した『富嶽百景』に続き、『女生徒』『懶惰の歌留多』『新樹の言葉』『葉桜と魔笛』『畜犬談』などを書いた。

『黄金風景』は『満願』更に『富嶽百景』に表われた人生への希望が現実的になつて、いた発想によつて生まれてきた作品である。家を追われ窮屈した自炊生活をしている時、戸籍調べの巡査に声をかけられる。彼の妻は私の実家に奉公していた女中のお慶だと言う。私は幼ない時彼女をさんざんいじめたが、三日後私の所に一家で挨拶に来る。私は驚き所用だと言ひ外出するが、帰りにお慶一家を海辺で見る。あれほどいじめたのに自分を褒めている言葉が聞こえてきた。私はこの言葉を聞き立つたまま泣きへ負けた。これは、いいことだ。さうなければ、いけないのだ。かれらの勝利は、また私のあすの出発にも、光を与へる。△と思つた。

いじめられても相手に対して報復するのでなく感謝の気持を持つてお慶に対して人間の愛の尊さをみい出す。人を憎まず恨まず信頼と愛こそ人間のいくべき道だと太宰は新しい人生観をみいだすのである。新しい結婚生活の第一作目にふさわしい作品である。

『新樹の言葉』は『黄金風景』の主題の延長の作品である。新し

い生活により新しい人間の生き方に歩み出そうとする作者の心境が表れ、新生の宣言が主題になつてゐる。△新樹の言葉△は再生、新生の言葉であつた。

太宰の書く自然は太宰の心情によつて左右されることは『富嶽百景』で既に考察したことだが、本作においても変わりはない。

甲府を、「擂鉢の底」と評してゐるが、当つてゐない、甲府はもつとハイカラである。シルクハットを逆さまにして、その帽子の底に、小さい小さい旗を立てた、それが甲府だと思へば、間違ひない。きれいに文化の、しみとほつてゐるまちである。

甲府贊美である。甲府に好感をもつて書いてゐるのは、美知子との新婚生活によつて過去のみじめさから脱出し、健康的な明るい家庭を持つたからであつた。そのゆとりが甲府がきれいな文化の染み透つた町に見えてくる。勿論甲府は文化の伝統もあるが、よりそれを感じるのは太宰の心境の問題であつた。

この作品の主人公青木大蔵は太宰治である。自分の現在の心境を語らうとしているが、虚構化して表現している。一見私小説風であるがフィクションの濃い作品である。大蔵の所である時幸吉が訪問する。彼はかつて大蔵の乳母をしていたつるの子供であつた。大蔵は一目でいい青年だと思い大歓喜と言えるほど喜ぶ。太宰は幼年時代を『思い出』に書いてゐるが、彼の教育は女中のタケによつてなされてゐた。△たけといふ女中から本を読むことを教へられた。二人で様々の本を読み合つた。たけは私の教育に夢中であつた。△タケは青森県北津軽郡金木村大字金木字朝日山三七六番地に生まれ、一四歳の時太宰治の子守として津島家に住みこんだ。乳母が一年で去つたので、叔母のきゑが面倒をみタケが子守をした。太宰は『思ひ

出』に叔母のことを△私は叔母に貰われたのだと思つてゐた△と書いてゐるが、太宰のことは叔母のきゑが母代りをしていた。彼女は母親たねの妹で、五所川原に分家するが、この時一・二年後ではあるがタケも五所川原へ行つてゐる。この二人は幼時を回想する時忘れ得ぬ人だつた。つるは二人の人物によつて創造された人物であると思う。現在甲府で家庭をもつて一人前になるにつけて思い出すのは実家のことであり、またその家の幼なき日々のことであつたと思われる。現在の生活の充実は迷惑をかけてきた一族への思いがつのり、家との断絶など過去の自分の反省、故郷への愧穢が生まれてきたと思う。両親でなく使用人に向けられていることは義絶の身であることを意識しているのかも知れない……。

当時の大蔵は△東京での、いろいろの恐怖を避けて、甲府へこつそりやつて来て、誰にも住所を知らせず、やや、落ちついて少しづつ貧しい仕事をすすめて△いる作者であり、△過去の悲惨△を持つてゐる人間である。従つて郵便屋に△幸吉さんの兄さんです。△と言われると自分の過去を抉り出されるような感じになり、△不愉快△△災難△△逆転△△難題△と思いつ白葡萄酒をがぶ飲みしたくなる。この大蔵は太宰の心境であると思う。

大蔵は幸吉と会うなり好感を持つたが、回想話をすると一層その感じを強くする。△こんなに陰で私を待つてゐた人もあつたのだ。生きていよかつたと思った。△大蔵のこの思ひは精神病院入院、妻との自殺を経験した太宰ではなかつたか……過去の悲惨の体験を経た人は人の愛を強く感ずるものである。大蔵は幸吉にどこへ勤めているかを聞くと△「そこのデパートです。」眼をあげると、大丸デパートの五階建の窓々がきらきら華やかに灯つてゐる。△當時甲

府の唯一のデパート松林軒を丸にしてゐる。町名は桜町・柳町と実名を使用している。小説全体実と虚との融合により成立している。

デパートに沿つて右に曲折すると、柳町である。ここは、ひつ

そりしている。けれども両側の家家は、すべて黒ずんだ老舗で

ある。甲府では最も品格の高い街であろう。

柳町に限つたことではないが、主人公の心境によつて街の捕え方も變つてくる。明るい太宰の心情は自然と街を良い街にする。太宰の新生の感情は街の品格さえも変えていくのである。

幸吉の連れて行つた所は望富閣であり、かつての幸吉の家であつた。幸吉は平然としているが大蔵は驚きここでは酒は飲めないと言

う。しかし幸吉は△感傷なんか無いんです。▽と言ひ寧ろ久しづりき

てみるともの珍らしく僕はうれしいです▽と言つて樂しそうに微笑

している。この幸吉の態度に大蔵は感激して強く生きることに人生の意義をみい出す。△自愛▽の言葉を繰り返し用ひ△死ぬもん

か△投げ捨てよ過去の森▽と言ひ泣くやつがあるかと言つて自分

では泣いてゐる。暗鬱な過去を捨て輝かしい未来に向つて強く歩

もうとする太宰である。望富閣には幸吉の妹も來た。大蔵は既に

かなり酔つてゐたが、妹の声をはつきり聞いてゐる。妹の△うれし

いのよ▽との声は嫁に行く時のつるに似てゐた。大蔵は△それまで

の、はげしい泥酔が、涼しくほどけていつて、私は、たいへん安心

して△眠つてしまふ。不安定な自虐の自己は他の愛の存在により、

安心し更生の道を歩むことができる。隣人の純粹な愛が示された

時、人は生きる張りが出てくる。今まで自分はだめだと自己否定的

な考えに促われてゐた者が相手の愛により、信頼されることにより

人間としての本来の自己を取り戻すのである。幸吉兄妹の出現は大

蔵にとつて救いの存在であつて、この着想は宗教的発想によつていると考えて良いではないか。太宰は聖書の文句を念頭において書いているのではないかと思う。

△黒ずんだ間口五間ほどもある古風▽の望富閣は太田町五九・六

〇・六一番地（現在の遊亀公園の南西の隅）にあつた望仙閣である。当時の望仙閣は渡辺弥吉の經營で甲府での高級料亭であり、太宰も誰かに招待されたものと思われ、ここをモデルにしたのである。当時の望仙閣は渡辺弥吉の經營で甲府での高級料亭であり、太宰も誰かに招待されたものと思われ、ここをモデルにしたのである。△當時火事になつた記録はないので火事の件はタケの嫁入先が三度火事にあつてゐるのでそれの連想である。なお望仙閣を望富閣としたのは『富嶽百景』を書いた直後であるので富士への興味から△仙▽を△富▽に変えたものと思われる。

大蔵は望富閣の火事を見に行く。恐らく当時の甲府の人々は火事と言えどとび出しが常であつたと思う。火事を見るた

めに舞鶴城跡に登つて、城跡は高いので甲府市街を良く見ること

ができる、火事の件の描写はリアルに描いてゐるではないかと思

う。お城で大蔵は幸吉に肩を叩かれ、うしろに幸吉兄妹が微笑して立つてゐる。大蔵は焼けてゐるが望富閣とわかると舌がもつれうまく言えないが、兄妹は平然として微笑してゐる。彼等は過去に何のこだわりもない△焼ける家だったのですね。父も、母も仕合せで

したね。△彼等の過去は世間的にみて幸福と言えるものではなく、母は死に商売はうまくいかなく父は井戸に飛び込み狂死にしたので

あつた。しかしその時どきを人間として充実した生きた者にとって過去に後悔はない。彼等はかつての自分の家が焼けるのを笑つて眺

められる心の余裕がある。大蔵の過去は違つてゐた。△この十年來、感傷に焼けただれてしまつてゐる▽のであり、この兄妹の心境

を思うにつけ、愚かさを、恥づかしく、と思ひ、醜悪にさえ感じた。

太宰の過去の恥ずかしさ、醜悪さである。現在の自己の生活をみると、過去の醜さがみえ、恥ずかしさがこみあげてくる。過去の反省・懺悔と明日への再生、新生の強い願いである。『新樹の言葉』は深い反省とこれから生きるべき決意の表明である。『新樹の言葉』は新生への言葉であるが、相手に対する普遍的愛……自己中心的な愛ではなく、相手のことのみを考える愛がある時初めて実現できるものであることを示唆している作品である。

『女生徒』は女生徒の一人称告白体の形式を用い、読者に語りかけ、と言う独特的の構想によっている。五月一日の起床から就寝までの一日の生活を描き、若い女性の心理の動搖を詳細に描写している。

朝は灰色で、圧迫的で自信がない。一人で食事をし、皇道を通り駅へ行き電車でお茶の水の学校に行く。学校ではモデルなんかし、放課後は美容院へ行き、帰宅して母と客のためにロココ料理を作る。独り風呂に入り、客を送つて戻った母の肩をもみ、夜中洗濯をして床につく。この一日の間に少女が大人になる肉体の成長、微妙な心理を描いている。労働者・先生・電車の中の女性・母・客など相手を細かに観察し、鋭く批判し、大人、女の醜さ、醜悪さ、世俗さを感じ、純粹さ・素直さにあこがれ、理想的なもの求めようとするが、生きていくためにはそれを押し通すこともできなく両者の間に微妙に揺れる自己を発見する。

雑誌などで人々はいろいろのことを説くが、本当の愛、本当の自覚が書かれていなくたよりない。又理想のみを求めることができない、俗世間への不安、父の死、姉の結婚など人生の楽しさを失いかけ

て、いる自分、私の好きなロココの藝術は、華麗のみで内容空疎の裝飾様式であり、純粹の美しさは、いつも無意味で、無道徳だ。と私の考える美の世界など私の心境を示す。

私は外部の世俗的な人々に批判的で不安であるが、生きる明るさはある。明日も又同じ日がくるであろう。幸福は一生来ないのだと解つていながら、きっとくる、明日は来ると信じて生きようとしている。幸福は一夜おくれて来る。……幸福は遅れてくるがそれを待ち続ける者である。

私は少女であるが太宰である。現世の人間への疑問を持ち不安であり、理想、純粹さを求めるが人々の思惑を考え卑屈に生きなければならない。平和なやすらぎの中にある不安であるが、とにかく明日は来るであろう幸福を信じ、遅れてくる幸福を待とうとしている。…………平靜な調和の中に一時の安らぎを求める太宰を伝えている。…………現実と非現実の往環の中で、作者は静かに内環を閉じる。⁽³⁾ 待つことに芸術家の大成を決意している太宰をみることができ、前期のロマンチズムから中期のリアリズムへ移行していく太宰治を読みとることができる。

『畜犬談』は甲府には多くの犬がいるが、その犬に對しての恐怖、憎惡が内容になつていて。甲府で太宰が体験したことであり、私は太宰自身である。私は犬を極度に嫌い、憎惡の感情をもつが、これは犬に対してであると共に人間に對してでもある。

友を売り、妻を離別し、おのれの身ひとつ、その家の軒下に横たへ、忠義顔して、かつての友に吠え、兄弟、父母をも、けろりと忘却し……。

犬の非難は人間の非難である。犬を通して人間の内にもつ醜さを

指摘している。人間やその社会はまるで犬のように太宰を襲い、噛みつく。犬に対し微笑をたたえ、いささかの阻害心のないことを示し、相手の機嫌をとりやさしい人間であることを知らせようとする。従つてつくづく自身の卑屈¹がいやになり、△泣きたいほどの自己嫌惡²を感する。当時の太宰の人に対する態度と自己嫌惡を表わしているではないか……。

太宰が住んでいた御崎町を西へいき、甲府中学校の前を更に西へ相川を越えると四九連隊の練兵場になるが、早春の頃その辺を散歩していたところ一匹の小犬がついてくる。この犬を銅うことに対するのは私の△内心恐怖の情³であり、小犬に対する愛情からでなく犬に対する憎悪と恐怖からの老獴な駆け引きであった。

ボチと言う名を付け長く銅っているが、ボチを愛してはいない。恐れ、憎んでおり死んでくれたら良いとさえ思つてゐる。

遂にボチは悪臭を放つ皮膚病にかかり、私は毒殺しようとして練兵場へ連れて行く。その途中ボチは赤毛の犬と喧嘩をするが、△私も共に死ぬるやうな気がし⁴て△おれは噛み殺されたつていいんだ。△△ボチよ、思ふ存分、喧嘩をしろ!と異様に力⁵むのであつた。この時点になると私はボチに同情し、愛情を感じていくのである。人間不信から人間信頼への道を歩む太宰であると思う。

毒をつけた肉を練兵場で食べさせたがボチは死なく、甲府中学校の前まできて振り向くとボチはちゃんとついてきて面目なげに首をたれ視線をそらした。△あいつには、罪が無かつたんだぜ。芸術家は、もともと弱い者の味方だった筈なんだ。△△△私のボチに対する考えは変りボチを東京へ連れていこうと決心する。ボチに対して真実の愛情にめざめてきたのであり、太宰の人に対する愛の

発想の表われであると考えられる。

人間一般への不信を、人間の個々との関係を解き明かすことにより、解消さしていこうとしたのである。⁶

人間不信、世間不信にとらわれていた太宰が人間信頼へ脱出摸索していく道がボチと私との関係の中に描き出されているのである。

太宰の甲府での作品は皆人生を肯定的に考えた明るいもので、基本的思想として人間の信頼と愛に期待するものであった。

病気はむろん恢復した。しかし心に深くうけた傷は、何ものももつてしても癒されなかつたようである。自ら致命傷と感じたそのことが原動力となつて、太宰の創作はつづけられたと言つてよからう。⁷

傷ついた者が他者の信頼と愛とによつて生きようとするもので、傷ついた者がもつことのできる愛の深さと明るさがある。

私のこれまでの生涯を追想して、幽かにでも休養のゆとりを感じた一時期は、私が三十歳の時、いまの女房を井伏さんの媒酌でもらつて、甲府市郊外に一箇月六円五十銭の家賃の、最小の家を借りて住み、二百円ばかりの印税を貯金して誰とも逢はず、午後の四時頃から湯豆腐でお酒を悠々と飲んでいたあの頃である。
(『十五年間』)

甲府での太宰治の生活は毎日三時頃まで机に向かいそれから現在の朝日五丁目一四番地の喜久の湯に行く。その間に支度しておいて、夕方から飲み始め、夜九時頃までに、六・七合飲んで、ときには「お俊伝兵衛」や「朝顔日記」の一節を語つたり、歌舞伎の声色を使つたりして⁸いた。夫婦水入らずの楽しい生活であった。なお酒は近所の現在続いている窪田酒店から豆腐は分部豆腐店から買つて

いた。

太宰の全生涯を通して甲府での一時期は最も恵まれた良き時であった。御坂峠の天下茶屋に来た時はそれまでの生活の離脱、強い反省、再生の意気に燃えていた。太宰のこの心境は作品で言え『満願』以来のものであった。『満願』は忍耐の後の愛の喜びを問題にしたものだが、以来不安は持ちつつも正常な人間の生き方を求めて続けてきた。従つて太宰の自己の暗さからの脱出、再生の意識は彼の意志によつてなされたものであるが、これを支え実現させたのは妻の美知子であった。太宰にとって美知子の存在は大きく、太宰文學を評価する時彼女の存在なしには考えられない。特に甲府時代の文学の太宰の考え方には大きくかかわっていると思う。

美知子は石原初太郎、くらの四女で、初太郎は理学士であり、石原家は当時四〇〇坪位の敷地に大きな家を持ち、借屋の長屋二軒をもつた経済的には裕富で教育熱心な堅実な家庭であった。彼女は山梨県立都留高等女子学校の教師をしているなど智的であり、主体性のあるしっかりした女性であり、経済的觀念にとぼしく、いいかげんで常識的生活のできない太宰とは正反対の人物であり、小説家の主婦として理想的な人物であった。太宰の甲府での生活の明るさは美知子に負うところが多かったと思う。

石原美知子は、初代とは全く対照的な理智的で教養のある娘であった。…………太宰は美知子との結婚生活によつて、はじめ放浪の青春に別れをつけ、本氣に文学に打ちこむことが出来るようになつた。…………この八年間の太宰を支えたものが、外ならぬ妻の美知子だったことは、いうまでもないだろう。

太宰の文学は美知子の支えにより成立したと言つて良い。普通の

娘なら恐怖と嫌悪をもつたであらう彼の過去を怖れもせずに結婚し、彼の生活を支えてきたのは彼女の知性と教養が太宰を認めていたのであつた。誰よりも太宰を理解していたのは彼女であつたと思う。美知子と共に彼女の母の存在も大きかつた。特に甲府時代を考へる時、母親なくして語れないと思う。寿館、御崎町の家を見つけたのも母であり、御崎町に世帯を持った時生活の必需品の総ての面倒をみたのは母親であり石原家であつた。その他井伏鱒二を初め、甲府の人々の暖い志が太宰治を支え、太宰文学の成立に關係していると思う。

注

(1) 津島美知子『回想の太宰治』人文書院 昭和五三年五月二〇日

(2) インタヴェイヴ (聞く) 桐馬正一越野タケ氏に聞く』子守をした頃の修ちゃん 国文学 学燈社 昭和四九年二月号

(3) 横本隆司『女生徒』論 東郷克美、渡辺芳紀編『作品論 太宰治』 双文社出版 昭和五一年九月

(4) 渡辺芳紀『畜犬談』 現代国語研究シリーズ2『太宰治』 尚学図書 昭和五四年六月

(5) 亀井勝一郎 作品解説『無頼派の祈り』 審美社 昭和五四年十二月

(6) (6) 注1に同じ

(7) 濑戸内晴美 太宰治の二人の妻 『文芸叢本太宰治』 河出書房新社 昭和五〇年一〇月